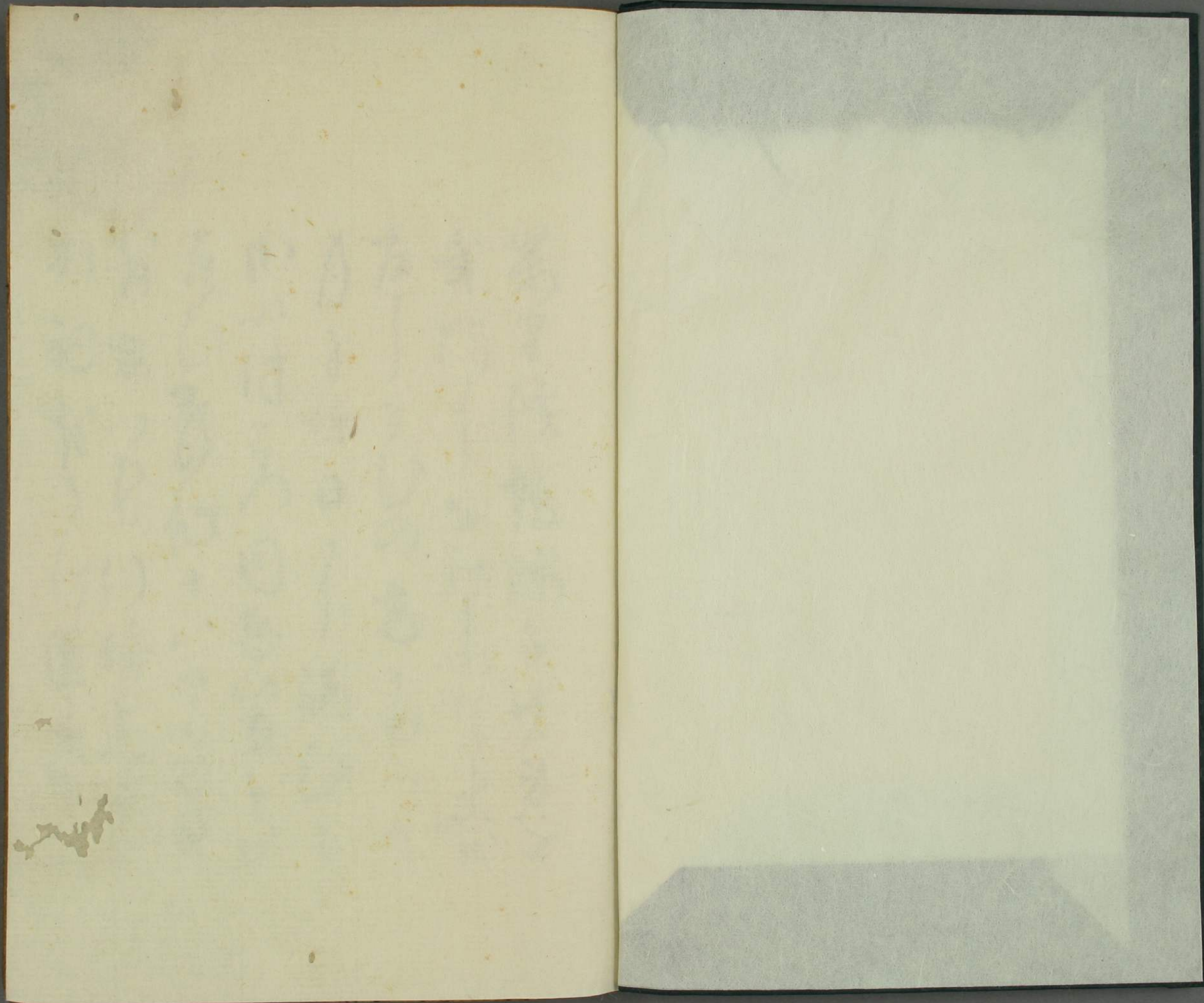


特 別
A5
6626
1





萬里渡鶴雛子其母を
幸門へおけらたうと
左へまじの志多ゆの
月子妹日へおし
かいつるる回志の友
死しお心十八か
育あつちの鞠高
判祀おけけ園中

賈叔結と書役のいふ
あはれまのいふ江蘇
多しおれ人のいふ
乞ふ神し一集あはれ
東のいふいふあはれ
さねといふいふいふ
島乃いふいふいふ
つとまといふいふいふ

此集やあつる書役のいふ
かまふあはれいふいふ
無子いふいふいふ
祝といふいふいふ



自叙

歌仙貝から一軸あり
もと美言を振りて句力
を争母結み行稱案の
判まもつらんてとて
法々々々々々々々々々々々
鏗鐙の聲よきほふの
浦あふ子於自之左右

強弱は眼と非とあり
るもの、争とありありあり
是と様ありありありあり
しりとおもありありありあり
白く書きて吉人の書稿の
を指ひ集めぬの故りあり
や、星霜ありありありあり
た、余江東へ赴きぬ

序ありありありありあり
海軍下法ありありありあり
中め投也とてそ途の目覚
—— 44 —— 江府
母持出給とて孝子當り
宗匠達の芳名ありあり
ありありありありありあり
一集とてありありありあり

やの 昼の 錦と か 何 抱

享保 三 卯

羽陰秋府後誹萬里溪

鶴錢述



歌仙貝

一番 左すれ貝
右すれ貝

涼しやうや 簾をもして 裸貝 鶴錢

爰より 忘れすもむ 雛の 皮 紅塵

左すれ貝 右すれ貝

とよみし 付用情 一 海

あり あり 梅 子 子 代 を

け せ 海 あり 雛 乃 数 く

あ ころ 子 ぬ 宴 あり 持 片 七

二番 左毒のむ貝

貝爪やむの兄君の叱送り 非琴

花貝の夕ま途の胡蝶や 紫月

花のあまきこの肩あはれ

いとく自しあし 右胡蝶の姿

の相々然るる莊周の心もあは

とたをうちとれ

三番 左まてしこ貝
右ほらるる貝

撫子や蝦夷もまてし貝撰 拵野

妖ものいつをを投て螢貝 流水

妖もの腐艸をわする志れもの

やおともろこしあもあめあそ

くまらるせし 牙平 拵あめす

こしーカあさつとるる貝

四番 左むらさき貝
右磯うい

なほや紫貝の洗ひそへ 霜禽

破ういしおよ、這ふ葉の大はる 翠樹

右の破うい葉の方の区をもろ
くうくくく 扇原のほひ
葉いつれもあはれりあま

五番 左あくく貝
右あまかい貝

西りく眉のまきあり櫻貝 文測
糸寒やまのまはるのかい貝 千奴

眉あまきあまらくまーは
あまはこのまきあまらく
まきあまらくまーの西りの
まきあまらくまー

六番 左玉貝
右袖貝

まいやくけまこく星籠 東羽
袖貝をこのむまらや夷儀 新中
あひす溝の袖貝娘くく

名ゆたのあつすや梅の
匂いもそひてむらむい
人すもやあふふさし

七番 左うす貝
右いらうい

色うすに貝うすをうすしあひ友
艸いれい男あひんう様貝一契

貝うすにをうすし晩のうすれみし
うすもをうすし男あひんう

アそつうをうすしむら意
の一般し

八番 左うす貝
右都貝

あし貝ハ伊を榎を極くおゆか
あ樹
あし貝の都へ駒あしへ
紫川

今やあつらん望月のと詠
一 左峰を起あはとま

おあはれハ御所のすまらねん
のけしよきをりお
お

九番 左 右 貝

ついで浦のぬきし貝の波 詠千
時をぬる藻屋のつら小尼物 不孤

左難して云藻屋のつら
はまおしつと右陳て
云小尼物ものつら

ついでぬきしお
をのみのおとちとかく
はつと

十番 左 右 貝

煙志を 樂まあつとをよし 立雪
跡を追小花も袖の雀貝 文里

左 少林 笙 孔 笛
右 高 雀 化 蛤

よつゝと拵と尻

十一番 左極座貝
右井戸い

昔て寝る所の香も極座貝 柳紅
千部(り)井貝も建(こ)おぬを(つ)丁谷

右の方水(つ)う崩(る)よる(み)
便(あ)や(ら)う(一)等(あ)く(海)寺(の)
すおぬ(ま)う(世)の中(を)う(く)て(も)

物(い)ら(ま)増(る)ま(し)

十二番 左あつ(る)貝
右(う)い(貝)

腸(い)つ(鮫)屋(て)る(月)の(鮑)か 蛟(雲)
唐(う)の(露)い(じ)貝(拵)ひ 如(昔)

照(月)の(あ)り(い)あ(さ)や(る)ま(て)
あ(れ)と(持)つ(る)の(う)い(の)
字(は)つ(る)あ(る)右(を)あ(し)

とろけりめん

十三番

左うつせ貝
右うつせ貝

揚控の床やすゆうつせ貝 弄流
春め東のさきと海にさきうい 四邊

ひかりおもおもおもおも
おもおもおもおもおも
淋しと文とととととと

思ひし水契れもおもおも
夕暮うおもおもおもおも
情あり描としりし

十四番

左うつせ貝
右うつせ貝

一雨の雲を織流や錦貝 海鶴
蟬貝も耳を配るや緑樹陰 関雞

おもを織流の風情とあり
しれおも耳を配る緑樹と

少少

あつて
あつて

十五番 左あつて
右あつて

志つて孫を承け古様 友紫

あつての男も似たり 杜あ 竹栗

孫を承けを翁八十の強
健あり男の似る尾徳の
あつてを後の侍りつれ

あつて

十六番 左あつて
右溝うい

戒志つてあつてをゆるせ夕汝干 萩可

金管あつてあつてをゆるせ夕汝干 友桂

あつての若くあつての好のひり
あつてのあつてあつてのあつて
あつてのあつてあつてのあつて

十七番 龍をおろり貝
右志くく貝

蛤の三符喰あしれ百千香 臯鶒
砂もこの仇もあるた蜺川 孤鴻

三符と詞をうけけるあし声
も砂もこの仇と塵もまな
丸をくくくくく

十八番 龍千粒丸
右小りい

那うあむ舛はあはちくまうい 沾尾
蟻のまじ小貝おきくり日向ほこ 大草

あまのつおと舛をいあおが
すもも代のいぬあまのたせむ
かういあまのくくくくくくく
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

六十八番之能諧標齋

行軒采五才叟判談



太平山採花序

太平山下治城之丑寅也猶如

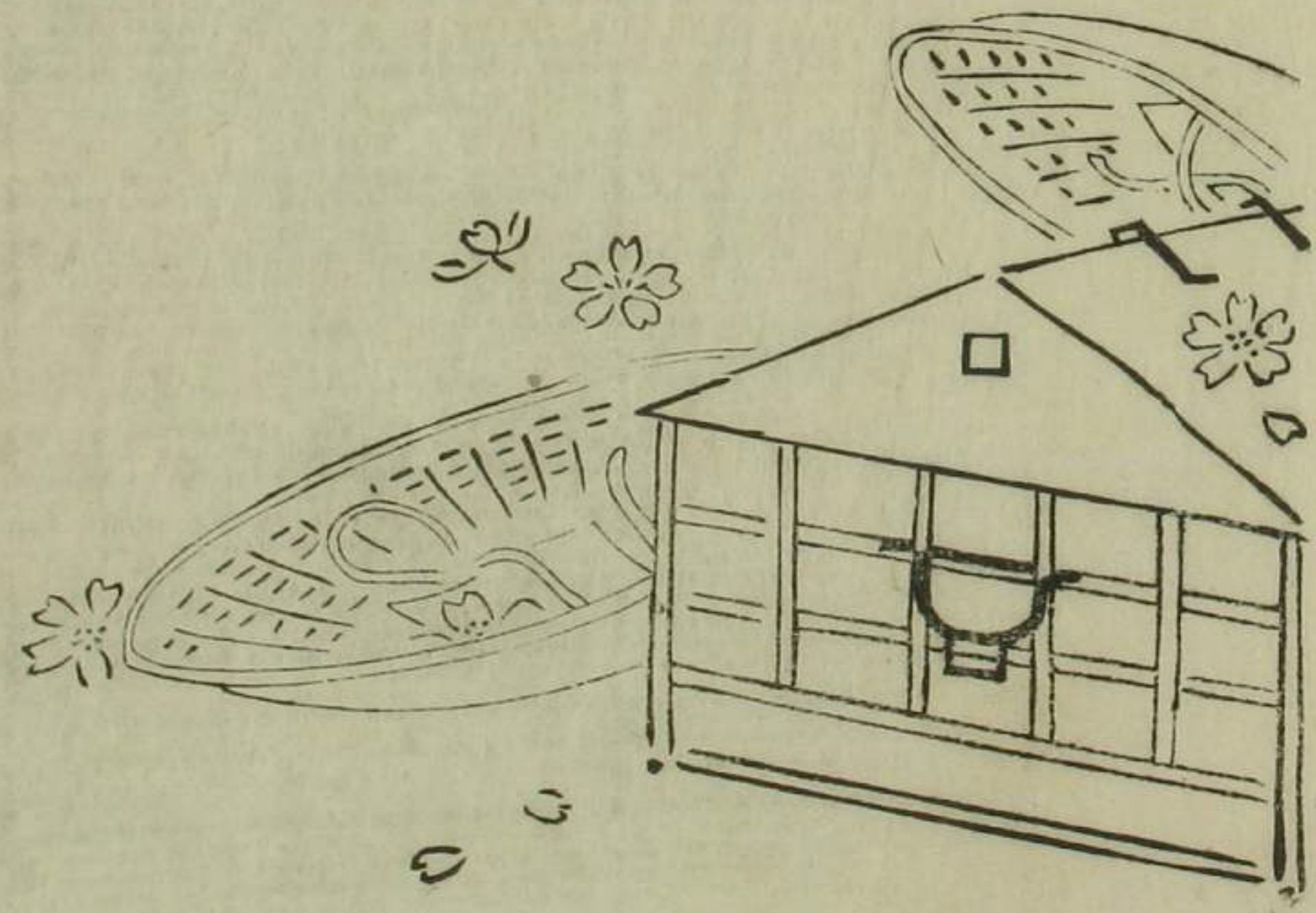
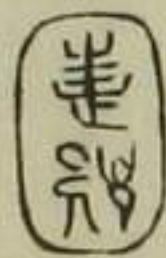
雉之有叡焉其所壇腕旁礪

沃田茂村民衣食於茲而名

與時互遭遇誰不仰止若夫

入船の的まうむの大平 詩集
 菊畑下大平山を忍河一軒 丁谷
 大平山白下帆柁橋下屋 石塵
 む然咲や大平山の抱ひを 弄海
 むを吐おの根は 友成
 初実や雪の簾の巻拜 北琴
 多いろの法螺も飛出す様は 大菖
 熊の裂衣枝や為むの大原 踏錢

洞旭筆



春の部

一集の計を詔且みり
つよしく先なる中詠吟
七章一をばしむ

為餅下底をま弓の引心 若狭
一拜み天おつ酔巴むの春 丈草
流あまそと三の屠獲実橋 非聖
潜龍の後のひま子仲の妻 阜落
驚うぬ風ん香た市代の出 嘉樹
劉の座ん代この実揚る家世 蛟雲

多毛ゆうし新冠ぬの毒 赤坂
三光いよの梢あり百あり 梅坡
胡葱の楯を庄ぬく且た 紫晃
を喰ふ寺院い妻の寒た 赤羽
海水の魚初午ぬ 詣 露後
虎の威を借着初午ぬ 泉落
もつ午に吟すれを信跡の音 如昔
白丁ハつらる利るけ菜た 湖雲
そのの樂する熊も岩戸あり 細州

脇指ハ骨中ニ有麻セシクハ
 向村のり灯りしり
 扇もの、掛をぬえや
 君代ハ鳴戸子立人
 青海苔の子を煮入日
 春ののつむる豆
 肩衝此欠を補小燕
 蕪の餅を謎りせ十二
 冬ふこの刺の香子
 蛟雲
 松伴
 馬耳
 寸松
 高冲
 東海
 寸木
 知守
 知角

良茶ハ起ハ松小記
 減毛ハ嗅ぬ白良の毒
 ちりちりハ湯を注ぎ
 ちりちりハ仁の端
 何つとハ子をん子
 紅紙燭暗転し梅の
 葛城の神子習小
 冬ふこの刺の香子
 蛟雲
 松伴
 馬耳
 寸松
 高冲
 東海
 寸木
 知守
 知角

峯下へ垢つゝ廻山に居
 鳥下へ引こま帶子合 塩 龜田 青
 淵内のお入柳へ程取産 赤樹
 集の池を昇し向柳を 志
 賣平を乃ち柳をなむ柳を 志撰
 舟の流を目えに柳系 子奴
 糸の川也翠麓の内に柳系 取山
 舟の川の陸を信行柳を 一契
 丑の時女ハるゝ尺柳系南 鯉川

糸を曲し題を隠し柳を 花吟
 半天の泡のそえしつやを味 前尺
 舟の曙若し柳陰 文里
 舟の思入志をへ河柳 関雞
 舟の後の後あるまをあら 橋昌
 舟の合の倒を差る柳を 志千
 舟の柳を百毒の外に女を 校也

院 内関山異樹怪松
 多ま津の七まじ木とく
 一爪七粒の梢あり

芽さくひんいづれ将門七色天童 鶴
 舟起の菴り力下雉の色天童 霜雀
 つと替つく鯨もいれ雉の姿 霜雀
 舟を吹けり研まじす 文江
 山あり子誰能音のまじす 後凋
 焦してや項羽の怒雉子の色 秋英
 此まのさきを標のおいけり 南車
 言ふまの足代もある木芽は 文洲

莫辭盞酒
 十分醉

今春むらぬ日傳司の様は 鶴
 張子の鷹を活す古約 夫菖
 海原下棟上崩れけり 非琴
 袴子居の立物ひかり 弄波
 余よを石も浴せ月涼 東羽
 安小見く土毫拵起す畦 志千

富士のついでに日本は
 履音のついでに日本は
 宿るや真女結小腕の程
 くらげのついでに日本は
 薩の尾を徒公家のついでに
 眼のついでに日本は
 低くは門もいかに秀人
 上よりあつて庭のついでに
 多つと仕る勤のついでに
 下下埃を醸す夕風

校を
 文に
 赤梅
 鼻を
 御千
 萩の
 大草
 赤梅
 弄波
 露海

こと料も五十下寺のついでに
 奈よりあつて庭のついでに
 春の子子風のついでに
 禿いそやは花をまいて
 いのついでに日本は
 居眠るは是術のついでに
 竹篋のついでに日本は
 水、結るついでに日本は
 吾少おのついでに日本は
 あまよりついでに日本は

鼻を
 非琴
 志千
 候を
 文に
 赤梅
 萩の
 御千
 大草
 露海

筆概も木も入るゝ敷のけ 東
 大子も駒もなごの借用 蛟
 半輪のもれん(欲) 龍江子 洵千
 髪もろり乱し 燈のそり 弄
 啼席の法も一頁のふ 如
 蕩すもろり 影小ついで 赤樹
 灯すのハ戯る(左) 蠟志を 志千
 土圭を 寝せろ 又寸奔走 菊丁
 るあ右乃がしすろり 陸の靴 文江
 子とせい 味も老らく 泉

全亀寺之櫻

出るんても亀を潜むや大櫻 丈草
 鐘撞く様 燈く下大昂 落後
 けろろんの 征みか娘 其賦
 狼子平やあはせむ山様 霜禽
 無地の帆もな 排様 入日 柏舟
 腐水する底を接袖の様 波旭
 筏士のまのふの ちをけろろか 沾風
 竹林の留守も成る様 蘭泉

行迹の曇るやぐら山様
滝川子星を佛せる様か
灸嫌ひ菜きくひや山様
つるをたつ日々の媒江戸様
厚房子砂をはあはるさねか
赤樹

松峯之不動の奉納

鞘の儂り縁起るに花の月
曉の山を削るに春の水
あ粘り新刀又ほあ底
文草
紫月
琴落

まらほと野たしいのほり
乃たや入流の門の曲も鞘
鯉の中迹へ糸溪の流を
妻雨も雪へ尻啄む野を
春もち民の毫も掛すか
くを繋ぐ妻の栗の刺の程
砂山の肉も落ぐり春の雨
さるるし音なり海の魚おひ
はるさねや秤目を秤す竹の俵
色紙
梅窓
八香
可殊
鼻施
朴志
沾大
海落
紫月

まをるひやまの乳房北一樹陰
集ても一くれし十の百
紅塵 几露

塔の系山晋子碑前子
醉倒

をられまは枕やむの叱倒れ
おすも男の霞の小丸海を流
鞠の作足下魚を捕る
召るれも虎も鞭を月の宴
私にさぬく萩もさらく
友紫 露後 波旭 東笋 竹旦 塩山

秋のまを峨と深る神の朝
文も武もあく肥る人眉
ゆきの日雪掃女房さるる
瑞珀も塵を撰法中の町
巾着の穴を却りていてら
丘の席光をひくく木の下
火の藁を合はるるさるる
片帆も笑を掠の投介
娘もさるる力鼎をあげて
おすもさるるさるるさるる
机州 紫 後 旭 笋 且 山 州 旭 後

おかしらやうから雨も機陰
一を覆しよ井水の州むら
唇と空著元くくよもはあし
不き門より瘦く世に戸
杖より藜一三本あるけく
吉柳梅水も陽報を知る
在深の世を憐れくひう
くくく神をのるる梅香
古郷より前羽矢折く遠路氣
席ぐく廣野の借産あお

且隣笋州の紫旭且州笋

餐應のまぐくくく志このをい
月堀當る井戸の羨ヶ漏
松虫まみみ試てく目ん鳥
穴入るくく小鶴あるあし
竹のあまのれ舞風も際も
さやあ麻んくくくあはりを
局上の付けく待理後の子
冊綴の梅子乳付く息
牙行い戸木杖はさしを盤
それい子五加杓祀の交を垣

毫旭山州紫且笋山隣紫

珠つおみ耳をひびくや百の壺 翠梅

花中の鳥ととりあするを

ちいれとむ子のり付あみち 其栗

鳥のけて文讀んたのむ 落後

曙下價いしましものむ 卑霍

割しむいさむの出入 女州

山にみれお初夜のやりち 且陽

か運てやまおあまたま雀 流水

餅州子禿こもるや海苔原 硯色

赤き餅か為いの中此斬か 柳叟

白柳下親かよる子荒仕る 非琴

ま至は中る立田下鳥雛 名舟

白壳瘻のをれかや子赤のむ 文車

後橋のろこも出る色樹あのか 赤樹

牛の尾を味あしやれりる柳 丈草

雞一對

お檀子けいのぬかめ目見鶏 鶺鴒

ハ梅庭んせぬ暹羅のおく樹 丈草

娘の伝言のゆく

ゆりたの海田の伝言拾は 可隙
初らくは片言を尋ねく

尋ねた梨の隣に桃の門 其栗

夕暮 東武 おとむく あま
たそ の 野 真 亭 す く
たそ た と た れ と ひ く 大 つ し 後

す の ゆ も の ゆ 後
賀 茂 長 の 末 お こ さ ぬ
友 の す む つ の ゆ ち
い ま す さ め

すれちし世やと

出女のいぢはさきの巨燈が 産後

二の股といふおま

ひ奥の血一ほの滝は 樵 こそ不

江都

到来の佳句 野は席の
高下る赤女 い ゆ
赤子の前ほをむく

一やらの 風流とま

誰よよの雪をちりし梅苑 沾山
 梅の香下隣つしもの物 桂室
 字を忘るぬ子孫を床梅を 敬雨
 子枝連る梅むしの身 曉雨
 毒の枝や木屑のぬけぬ畠中 自慙
 田境の垣丁ろちたれ一守梅 寸牛
 そろり斯く怖くま谷のち 為邦
 くらひすやけいり記 雪の竹 翠羽

池のほとと 赤梅の宿 沾院
 菊子からてる梅の枝 祇法
 鍋黒きついで流る椿の 訥子
 蝶のちりて後倉山の土の穿 湖十
 いろくさ魚を採出す日 魚子
 てんくや虫さされて水の上 平砂
 燈火を追ひ圍の小蝶を 玉芥
 庚申の塚もくみ壺董 素丸

董野一賦氣やあふるるゆか
 女童の岨くさや松葉を
 塗まてつ時ころは春のむ
 何鳥の舎を借すや花の志
 懺さる雨の苦もを雛祭
 世の中は待せくくあくるひ
 おぼるげや松原隈の山様
 衣くや春こま洗ふ山櫻
 雞くくもむ山さる

來風 占雅 喜阿 樗山 占李 占凡 常仙 百洲 御風

糸糸ハ一重ゆくをわひふ
 いちまのれやおの宛中や昔話
 下くさけして姪もひの陰
 門口くお織もてはむらひ
 おおの静まつふ柙を
 春柙や春の風のとまるし
 蛸と瓜列崎のつたをちる向
 やりあまやひたもあまふ大根
 春雨をひめやうお後の三布かた

少長 局菴 珪珠 訥子 占山 巴船 米仲 青嶽 魚貫

夏之部

接るころは	生かたき	裕る南	き	栗
あはれの	あはれ	涼	眞	産
くま	入	園	屋	ま
竹の子	は	文字	も	ろ
笋	や	一	あ	く
あ	竹	の	葉	の
ま	り	弁	や	名

けいけい	は	は	り	の	橋	松	涼	山
さ	り	利	の	法	方	を	齊	ま
是	も	亦	戸	の	虫	の	ま	地
打	厄	り	妻	を	か	ら	に	新

其栗高士偷用の

山莊 州 木乃

筆 あり あり あり あり

青瓦浦日之酔あつを醒すに 宿所
 帷子買也 けりありこめ 其来
 奥くくと世以ハスニ才 駒 丈草
 ありま睡りし路の後川 杖架
 曇る夜の月此米長を待たて 雨亭
 新米孫の精兵と見え 死二

何の飲真
 表はあり
 硯を仕廻し
 古酒のぬれ

雲詩
 丈倉々

中入のまじり尾は刻りあり 梅坡
 禁酒淋しくあつくと蚊屋 露後
 五六里の驛するに何ものか 丈草
 折る玉をまをまをむ彩尾 泉遊
 昼飯を群る居眠る烟の月 松伴
 吹越くてつづつ麻袋をく 弄波

比丘尼名もさくらりの切髪
 ころころい巻也下々帯の尻
 約束の縄あまぐれ陸揚々
 重んじし海蔵も控現
 女鞆の並ふや株木大分尻
 三とせま一店優女金袖
 面白く思む瓦る唐津盆
 ハやしをたたくと振る鞆鎌
 月汗々至上の後主老道
 百足をいづれく赤銅

鼻霧
 堀城鼻弄菖拖付新堀

何さあてもさう海也の立込女
 女々々仕ふ髪をた黒海苔
 名
 森くも稻荷の長宮平あま
 主策をさく買あさく一か
 月月雨の仇あふは耳敏川
 下駄うに娘肩もかりり
 可も初々つても公榜示杭
 片くく浮架守日千百
 産堀の宥世いふ海土就
 宇治より祢子を踏み来る麻

鼻 弄 菖 拖 披 傳 弄 菖 後 鼻

言すれを祇子のひりぬ白の
 院をるやしてあふれ井の月
 何の面せめて一其の菩薩面
 伊達を振らぬと土主憎水
 顯して雪のあけぬけぬ
 夢のまよりつゝあふれゆれ
 十文字活て備くまら物垢
 皆出較つゝいと世解とを
 る字の言をよあむむの下陣幕
 笑もつゝゝ毎つゝはれに

後 地 伴 弄 泉 菖 坡 伴 殊 毫

けりらつゝあふれゆれ
 といのらけりし約白約
 むらつゝあふれゆれ
 くのあふれゆれ
 白もあふれゆれ

神の語襟けしのたて杜若 病後
 雨々々々七日病てを杜若 梅坡
 消張の流北矢つじり子向 流旭
 其又安の幾畝何反杜若 古樹
 脇嗅の力を免あ守杜若 感弄

箕士こじりたるあはしる 詩栗
 柴刈こも道ゆく海邊時鳥 文里
 ちし乾くさや海ら 蜀魂 文例
 おもや居のまの奥に杜宇 来 馬耳
曉るほろく子寸を流り
居る女侍は讚し
 糸もつとてゆてくれはる 泉宿

暮 歸

倒載の山はいつて郭公 可隙
 昏れも廻つて鬼百谷 露淺
 釜はつたのまよひに居 屯實
 砂地より琴柱ぬる草外 且陽
 雁のあつたまを疾せ月の昼 湖舟
 常り勝れしう腕を起さる 士林

筆の香を服たつた梅嫌
あけ無地く伊達も籠り
心も何れも怪氣帆を上
言ももて下りて竹の床同
壁持の欠を白眼む石露の毛
利根下りまゝあゝ吼く
足代の上より雷の落所
哀んく傷らす瘡も
塵さもゆり治の持女郎
侍士の焼火を昼笑ふ胸

知角
花吟
林
隙
陽
實
淺
湖
以
角

笈扱の踏おにむも月や毛
ありとハ降う若州の侍
字日本の跡追もせり巾
亀を扱くくもくもむ
腕疥の多木を兄と義を活
唐女も寝ぬえ和語は物か
之玄帳よりけりへる時
太鼓もあへり向ふ組板
白雨も一刻上る掛海
帝帳も枕も流るやう間

泉
雀
林
湖
塵
角
實
陽
隙
吟
雀
林
湖
塵
角
實
陽
隙
吟

磯北を神もゆるけかけ
 志の情のあま入 音
 舌捲て水を掬れとあり
 世ひもあま 雲 餘こたり
 いつふ秋通るとい粟俵を
 見ぬも餌出のすくりに
 袖口の厚子をさるる田舎者
 針をさしぬより只の一息
 きれすと靴さ座敷の若
 舞まらうとく詩ひ出す
 場 隙 吟 湖 実 林 後 毫

鯉の一句とありせしれ
 執向はらうとありし
 ぬくもあま 垂

蟹の山へ詩人か訪る 初鯉 露後
 鯉さふ月もあまあり 已の浪 萩可
 幟うね海もあまあり 大家中 丈草
 帷子のと日定まるのく形が 非琴
 水鳥の字を志す 糝うさ 祝尺
 天鏡池の標や摺るる羽拵 東羽
 妬もあまあま 惚るる花の形 石雨

びくらの尾に初る自あすひ
 いまもあぬて待よの葉の形
 一葉
 夢の心もあゆまぬ葉の内
 八香
 沢河のほとけの女の形
 以仙
 袴のころの絹路もあま更料
 可際
 石竹のふく島への水種
 旦陽
 暮経のころのいさぐり田柳並
 多を湖
 河骨のあつ井田の節のいし
 嘉樹
 泥をぬくむ余さす立地あつ
 凍芦

母神の思ふおもく

めの温泉のか減をこころあぢか
 昔あ
 ぐんぼくの尾袋もあつ五月の
 夫昔
 あけの鏡もあつあつ
 下石
 さつしんじのしりあつあつ
 流あ
 五月のあつ一刷毛もあつあつ
 立雪
 あつあつあつあつあつあつあつ
 志千
 祖あつあつあつあつあつあつあつ
 毒密
 玉工のあつあつあつあつあつあつ
 鼻樹

持心女の御守もろふらふ 琴瑟
陰の日の川尻 漆木河原 文里

閑中五月雨

よみよとて擡ぐ花女のしづき 泗水
ふゆある樹木 夏に揺るへ 露後
ひさしの海を物とを揺る 朴志
下流をむすふ用の 暁 詩栗
藍梅の露より月のこと 好閑
むす十枚 笛の 魂 有隣

放されはを泣き 唾つ 北湖
夜と云れし 雨の 一河
鼻の雪 枕おほき 遠き 夫 菖
赤い 仕立る 位は 遠き 泉 落
古つら なる 楊梅と 揺る 艸 也
新 ぬらひ ぬらひ ぬらひ 非 琴
山の 端子 麻を ぬらひ 此 酢 着 板 傳
百中 黄を ぬらひ ぬらひ 志
朽木 盆 月 勤の 心 元 栗
さる 照ら され ぬらひ 産 於 湖

遠く三子世外の蓋
懇懃古る子共バ下講中
川やしの夏を隣の下訪階子
いよりの食の出来も疵瘡
病のぬと金具をたる老の袖
老者の手柄やとらば整
咳ひをつ換身もとも振むる也
必荒出他の脚普積
浮州のけを寝ぬをむる也
くぬ店を隣階こまぬく

河内志水也水信

有つとハ自力の病いさて山
良菓を記入札の岳
旅陰の又を松栢(りり)と
出らあいて聳ま子や、
祿んとて登れと野河の浪あ
のすもをのこ洞へ町
惣少ふをさる割毛君代
上手て活あへちの
如き輪ハぬこす以也の夏
短子啼ひを杖太清

圃平也水信

宿志新志をほりし
あしひし百人の佳歌
他の備へし深き物
もしくしめさるる
すすめす

於井戸のうらむはあらむ此 露後

投入のあし降つてはまらぬ

と答ふいす蔓入の所の也 夫昔
いろ香みお世外なるをいふの也 秋英
なげまふ海をさしりてる朝 古桂
山嶺より較るるや小嶺山 桂安

松しるるやあやうしめはる 四の
改泉川下流あり指ぐ尺の節 赤紅
昼の月影の吐返に光る 溪石
元師の秘しめ指流下毒流 赤月
あつこいこゝろさ首合ふ深寂 赤梅

引楊謝客

禮のほまき治深田りや昼の嶺 露後
まをさの川をまきいりやあふの内 けふ花

山 店

薄やしの筏ついでに太
下船ひびく又立の矮鶴
とひまつ持過を陸のいさみく
思やまきしなる瓢たゆり
待りのよりおこむ松の海
岸を搔くもは海とあはれ

玉泉 崔錢 彈多 紫陌 東々 何仙

うららかに 好まほより恨ん
うらまをこまなく水入る妻
うらまの袖をくまの吉原磯
石碑のうらまのうつろ過時
去りては逆子の浪枯の墓
詩の眠りを世にのこらし
岸は海に横たひのりかみ山
いのり涙ふせく神の名をす
はまやちの海を走る苦み野の草
月をうらまに こそよのほ

千卷 泉 水 東 仙 荃 泉 仙 水 陌

よる所の夢を都のつらさの
通り矢はくつらさの草を鞭
らるゝのこころはくつらさの結
妙と申す所の中の申る者
百とせし下戸を隠居の親者
蕭ハ氣房をとり陸奥
族様ハ之を誂むけしのは
妙々さうさの耽る行葉
以て友を覓て入一泊のいと
あまは下地う下管の昏

泉 茗 陌 仙 泉 東 陌

月の宴はあまうみほん
世最ハ世とる言の細るを
らるゝの尾とふもの忘れあ
あまのあまをぬく走る毎舟
我が船を二つあたる初秋衆
つとく秘するよとて又綱
品不々他領を歩む泉茗
竹の葉並で盈る牛の心
連城の襲うやくむしり
旅の端乃何くあひ

泉 仙 東 茗 陌 泉 茗 何 毫

大筒を三放白すれみけ
 中下
 名の長尺鯉の床ノ口也
 けり弄
 岸のゆきしん 鯉る多ゆら
 じや
 所 指の箴の乱らのこの
 一亨
もろこし 己負るあり
 千金を森と掃りの法を書
 おろ
 自一合のあまり包む法は水は
 夫菖
 味はくる癖はおの味
 転実
 すしはおの法を画るは
 蛟雲

川舟の踵もをてとてみか
 紫川
 筏主の就の屋を掃りみ涼
 丸々
たの川の入り目を持すみか
 松伴
 すしは川中の洗ひる
 鳳尾
 ちが帆も為も居るあらは
 酉仙
 鯉の口もつらあらはら
 一契
 研切つく空のあらはらはら
 海産
飲く不食上戸のあらはら
兼居るやららら上古の良き
あらはらら陸やらら白

蟬 一斗有虫海とこれの

ふみくみさいへるま

鳴つれくふと振あや蟬の暮 露後

大薩の自余に節赤せこの色 露伴

解くたハ十八の忍原 親 後千

斧の柄の毛ま入たり 露の淵 新 宇紅

椎の木北の巾中を先通 白雨 一 河

夕くともう 敵まをま 龍走 紅 弄

夕まも二十五弦の音深 春 歩

毛纏むむしらの下

あまのまのくくくくくくく

了ら西尾一陣を送れ

夕くともう 夕くともう 又日乃 野 梅 坡

夕くともう 夕くともう 下さの 麻 雀

矢根石 夕くともう 夕くともう

夕くともう 夕くともう 通 矢根石 紫 紅

江 都

季の前 松をまつく
前を 唯す

連心 軒 崇より
又 昔 非 琴 へ 又 通 の

白くくくくく
 耳のあやうといふ
 裁く集中の
 とに

人歌を子に記されず 郭公 沾洲
 下戸なるし 海をまよふた 波を 起波
 茂草の海をさすもの 軒の連 局 菴
 園と知れんをさる 花とあはれ 女 芙蓉
 二声を一つ名 研海をさす 三升
 卯の朝の垣に牛の通をさ 春阿

うのをぬきし 出づ園の標し 半溪
 山は瀟々れり 青荷乳 菟朝
 小鏡より大筒放す 牡丹は 沾洲
 今も使者の詞もさるり 乾什
 むすの乳極む 花のむ 為邦
 後世にたすむ 女 買れは 百例
 花の香もあつた 杜若 芙蓉
 うつ子の神を 一目ぬ 北野 沾洲
 かつお荷下 鎌倉山と星 沾山

新あまの多き宿のほをえんり
 川音平あつさわくむ月日
 子引れは巢床の虫螺壳
 追ふ人き又追ふは蟹た
 可くけたところくまおの玉
 層のむやいあかき咲所
 夜中一平地紅あつる首合の船
 小巻の健しつらあ馬
 志るは心の奢の出る星らぶ

宗瑞
 真貫
 市原
 仙真
 占川
 倚石
 咫尺
 湖十
 青峩

鯉の苗を庭をのころあやふ
 立膝あつるあひる園た
 常仙
 上下と裸のふるをりすみ其角
 借涼しやうる岸の灯の光
 火を清け川崎をたつとむ
 敬雨
 吹切るわねくをませこの色
 川先の州を沈るはる水

長芦
 常仙
 其角
 占山
 敬雨
 魚子
 沾禱
 翠月

作龍やまのの力を推すの力 牛子

鳥の推し

山田東郷兵衛 佐藤氏

山田先流精松 流書

東の海上 東

東の海上 畢

